

漱石探究

——『こゝろ』から何が見えて来るか

佐藤泰正

一

〈探究〉とはいささか大時代な言い方だが、あえてこう題して漱石世界の中に踏み込んでみたい。恐らく漱石の世界をひきしぼってみれば、『こゝろ』一篇に行きつく所がある。作家以前のエッセイ『人生』（明治）にいう「思ひがけざる心は心の底より出で来る、容赦なく且乱暴に出で来る」という言葉を作品に具現化すれば『こゝろ』一篇となる。また続く自伝的作品『道草』を盾の表とすれば『こゝろ』は裏となり、後者を表とすれば前者は裏となる。また『こゝろ』における明治への訣別なくして、晩期最後の『明暗』はありえまい。

『こゝろ』自体は多くの謎に包まれている。先生を死に至らしめたものは何かという問いひとつ取っても、それはKへの裏切りか、先生にすべてを語れと迫る〈私〉という語り手自身か。あるいは〈明治の精神〉への殉死ということか。江川卓ならぬ〈謎

解き「心」——先生の遺書」——という課題にじっくりと迫ってみた。

以上はこの夏の大学院公開講座で語るための要旨であったが、たしかに『こゝろ』は多くの謎にみだされている。何処からとつてもよいが、たとえばKとは誰か。その内的、または外的なモデルともいうべきものがあつたのか。Kへの裏切りとは何を指すか。これをめぐっての極めて魅力的な発言に、高橋源一郎『日本文学盛衰史』の「What is K?」と題した一章がある。高橋氏は端的にKのモデルとは、石川啄木にはかなならぬという。周知の通り啄木は明治四十三年八月下旬、『時代閉塞の現状』と題した評論一篇を書いている。これが書かれたのは〈大逆事件〉の二ヶ月後のことであり、幸徳秋水ら二十四名に死刑判決が下される五ヶ月前のことである。

「強権、純粹自然主義の最後及び明日の考察」という副題のついたこの評論は、自然主義文学の停滞と矛盾を強く搏ちつつ、

漱石探究 ——『こゝろ』から何が見えて来るか

「我々は一斉に起つて此時代閉塞の現状に宣戦しなければならぬ。自然主義を捨て、盲目的反抗と元禄の回顧とを罷めて全精神を明日の考察―我々自身の時代に対する組織的考察に傾注しなければならぬのである」という。これは明らかに朝日新聞文芸欄に寄稿の予定で書かれたものだが、ついに掲載されることはなかった。啄木はこれについて「明治四十四年当用日記補遺」として、「前年（四十二年）中重要記事」として、次のようにしるしている。

「思想上に於ては重大なる年なりき。予はこの年に於て予の性格、趣味、傾向を統一すべき一鎖鑰を発見したり。社会主義問題これなり。予は特にこの問題について思考し、読書し、談話すること多かりき。ただ為政者の抑圧非理を極め、予の保護者、ついに予をしてこれを発表する能はざらしめたり」という。ここにいう「予の保護者」とは誰か。啄木は明治四十二年三月から朝日新聞の校正係として入社。二葉亭全集の編集などにもかかわり、また漱石の作品の校正なども手がけていることから、文学上の先輩として漱石を「保護者」と呼ぶことは不自然ではあるまい。また漱石が長与病院に入院中には見舞つてもいる（四十三年七月五日）。東京毎日新聞に啄木が書いた『弓町より』や『性急なる思想』などに注目していた漱石は、「うちで書く気はないかね」と誘いをかける。やがて啄木はこれにこたえ「心をこめて書かせていただきます」という。

明治四十三年九月、朝日新聞主幹の池部三山が、転地療養中の漱石を伊豆の修善寺の菊屋旅館に訪ねる。至急相談せねばならぬ原稿があつて君を呼んだのだと漱石はいう。啄木の例の原稿だが、一読して三山はこれはすばらしいものだと言ふと興奮しつつ、しかしこれを朝日に載せることはできないと言ひ、漱石も頷く。やがて翌四十四年二月はじめ、退院を前にした漱石を長与病院に啄木が訪ね、入口の近くで二人は会う。今日、病院で検査を受けたが慢性腹膜炎だと言われ、これが結核性であれば長くはない。そこで先生にもう一度ぜひ会いたくて来たのだが、あの原稿はつまり喜んでしたかと啄木は訊く。いや、あれは傑作だが、時期がわるい。「きみの原稿が載れば、朝日は大きな痛手を受けたらう」と漱石はいう。

幸徳たちが処刑されたのは一週間前。あの事件はデッチ上げで、幸徳はなにも知らなかった。なのに、新聞は沈黙を守っている。「そんなところで先生はこれからなにをお書きになるのですか」と聞けば、「いままでと同じように書くさ」と漱石は答える。私にはできない。幸徳はただ書いた、「空想しただけです」。幸徳は書いたが故に処刑された。「わたしはもう、先生にお渡ししたあの論文のことなんかどうでもいい」、「でも、幸徳たちの処刑を許すことはできない。そのことは書かれねばならない。想像力を罰することはできない。先生はそのことを書ける場所にいらっしゃる。なのに、先生はなにも書かず、なにもおっしゃらないのです

ね」「そうだ」「わたしは間違っていますか」「きみは正しい。だが、大切なのはそのことではないのだ」。こうして二人の会話は途絶え、別れが来る。

あえて高橋源一郎の描いた小説的場面をふちどって見たが、高橋氏の筆は漱石、啄木両者のやりとりを通して、切迫した啄木の心情と共に、散文家としての漱石の苦渋をみごとにつたえる。

「きみは正しい。だが、大切なのはそのことではないのだ」という。また先の三山との会話では「ぎこちないのだ」という。何がだと問えば「なにもかもだ。そこに、輝く言葉がある。なのに、それを載せることがわたしたちにはできない。」「それがぎこちない。それでも、わたしはまた、なにかを書かねばならない。それも……それも、ぎこちない」と呟く。恐らくここで高橋氏が問いつめようとしているのは、近代における散文の問題であり、ありうべき文体の問題である。高橋源一郎はこの同じ著作のなかで、漱石の文体にふれて次のごとくいう。

『坊っちゃん』はひと息に書かれた。「漱石の頭の中で『坊っちゃん』は音楽のように流れていた。漱石はただそれを写し取るだけでよかった。漱石はその書き方を生涯に一度しかしなかった。」みずからの楽しみと共に、「失われた時を見つめ、その時と共に去った死者を召還するために書いた」。やがて「漱石の中から詩は失われた。正確にいうなら、漱石は自分の中の詩を殺した」。

漱石にとって小説は「日々、日課のように書かれ、読まれるもの

であった」。詩は死の領域の住人」だが、漱石にとって「小説は生の側に属していた」。「漱石が選んだのは明澄な散文」であり、「その散文の中では、どんな曖昧さも生きることは許されなかった。救済もなく、また希望もなかった。真の絶望もなかった。なぜなら、ふつう人はそのように生涯を送ることしかできないからであった。」

ここには高橋氏自身の漱石という存在、その文体への熱い共感が語られている。しかもその漱石にすべてが「ぎこちないのだ」と語らせる。「戦争と『大逆』の間」という副題を持った桂秀美の『『帝国』の文学』の書評でも、高橋源一郎はやはりこの言葉を使う。「漱石が『大逆』事件について書かなかつたのは、そのことを表現できる言葉を持っていなかったから」であり、あえて書けば「たとえば『破戒』のようにぎこちないものには」かならず、漱石は「それを選択することはできなかったはずである」という。ならば漱石はついに大逆事件については考えなかつたか。いや書きえなかつたか。恐らく最後に『こゝろ』の先生が「明治の精神」への殉死を言う時、漱石は何事かを語っていた、いや語ろうとしていたはずである。しかしこれについては、いま少し後にふれることとなろう。

二

そこでKのモデルとしての啄木という問題だが、すでにふれた

通り漱石はあの一文、『時代閉塞の現状』をあずかっていたながら、ついに朝日に掲載することはできなかった。そうして啄木は無念の想いを抱いたまま、明治末年に死を迎える。その漱石の負い目こそが、先生のKへの裏切りというドラマの背景ではなかったかと高橋氏は問う。しかも何故Kかといえば啄木出生時の名は工藤一であり、後入籍して石川となる。即ちその頭文字はKであり、『こゝろ』にいうKが僧侶の子であり、のち養子となって、「Kの姓が急に変つてゐたので驚いたのを今でも記憶」しているという。中学時代をふり返つての先生の回想とも照合する所があるという。たしかに興味深い解釈であり、Kを幸徳秋水（渡部直己『不敬文学序説』）や夏目金之助（桂秀美『「帝国」の文学——戦争と「大逆」の間』）になぞらえる論に較べれば、はるかに芸は細かいといえるが、しかしこれらは単に恣意なる推測とみるほかはあるまい。ひとりの人間の遺書における回想という、そこに設定された表現的空間、そのホリゾントの深さにおいて、Kというひびきはいかなる実名にも、固有名にも還元できるものではあるまい。KはまさしくKたることにおいて生きる。カフカの代表作『城』や『審判』における主人公Kを持ち出すまでもあるまい。むしろ問題は次にある。

先に引いた啄木の「前年四十三年中重要記事」の一部だが、「ただ為政者の抑圧非理を極め、予の保護者、ついに予をしてこれを発表する能はざらしめたり」とあった。しかし啄木の日記中、

この「予の保護者」の一句はない。高橋氏がひそかにすべり込ませた部分であり、この一句があるため漱石、啄木両者をめぐる葛藤はあざやかに生きるが、これは明らかに虚構であり、『日本文学盛衰史』が文学史の体をとった小説であり、虚実とりまぜた記述とみればこれを非難する理由はないが、やはり問題は残る。

そこでKのモデルとしての啄木という問題だが、啄木があの一文（『時代閉塞の現状』）を漱石に直接送ったという事実はない。まして漱石が寄稿を促したということもない。すべては虚構というほかはないが、しかしただひとつ、この『時代閉塞の現状』が四十三年八月下旬執筆という年譜の記述を辿れば、その八月下旬、漱石自身修善寺にあって、あの「忘るべからざる八月二十四日のこと」という「三十分の死」を迎えていたことこそ、微妙な伝記的照応というほかはあるまい。漱石はその日金盃一杯血を吐いて意識不明となり、その三十分の死から生き還ることが出来た。啄木の先の一文の執筆がこの時期であったと、後に知った時、漱石の胸にはただならぬものが残ったはずである。

「愈現実世界へ引きずり出された。汽車の見える所を現実世界と云ふ。汽車程二十世紀の文明を代表するものはあるまい。何百と云ふ人間を同じ箱へ詰めて轟と通る。情け容赦はない。」

「人は汽車へ乗ると云ふ。余は積み込まれると云ふ。汽車程個性を軽蔑したものはない。文明はあらゆる限りの手段をつくして、個性を発達せしめたる後、あらゆる限りの方法によつて此個性を

踏み付け様とする」という。言うまでもなく『草枕』末尾に近く画工の語る所だが、この痛烈な文明批判はさらに続く。「一人前何坪何合かの地面を与へて」、この中では勝手にせよと言いながらその周囲には鉄柵を設けて、「これより先へは一步も出てはならぬぞと威嚇かすのが現今の文明である。」「何坪何合のうち自由を壇にしたものが、此鉄柵外にも自由を壇にしたくなるのは自然の勢である。憐むべき文明の国民は日夜に此鉄柵に噛み付いて咆哮してゐる。」「文明は個人に自由を与へて虎の如く猛からしめたる後、之を檻奔の内に投げ込んで、天下の平和を維持しつゝある。此平和は眞の平和ではない。動物園の虎が見物人を睨めて、寝転んで居ると同様な平和である。檻の鉄棒が一本でも抜けたら——世は滅茶々になる。第二の仏蘭西革命は此時に起るであらう。個人の革命は今既に日夜に起りつゝある。」「——あぶない、あぶない。」「現代の文明は此あぶないで鼻を衝かれる位充滿してゐる。おさき真闇に盲動する汽車はあぶない標本の一つである」。

いささか長い引用となつたが、この画工の口を突いて出る文明批判はいかにも苛烈であり、文明の矛盾を刺して仮借ない。これが画工の口を借りた諷語に似て、その背後に息づく漱石の痛烈な文明批判の眼のあることは明らかであろう。同様、初期の短篇『趣味の遺伝』の語る所もまたこれにつながる。冒頭の戦争を狂気に始まる惨なる地獄図絵として語る主人公〈余〉の空想は、さらに凱旋の将兵を迎えては、その背後に「満州の大野を蔽ふ大戦

争の光景」を想い描き、そこに見る生の極限に狩り立たされ、追いつめられた兵士たちの〈一心不乱〉の、言語を絶した〈玄境〉ともいふべきものを語りつくそうとする。これは評家の言葉を借りれば、ここにあるものは「敵と闘った戦士としてではなく、死と闘った戦士としてのみ見ようとする眼」であり、「戦争にまき込む側でなく、まきこまれる側」から見んとするもの、さらに言えば戦争を国家権力の戦いとみる「客観的な眼」と、どのようにくだらない戦争であっても「それを見ぬくことのできぬ兵士にとつては、天命の如きものとして戦っているのである事を、兵士の場を下り立っている眼とが、交錯している」(駒尺喜美『漱石における厭戦文学——『趣味の遺伝』』)という。言わばこの重層的な作家の眼こそ漱石作品をつらぬくものであり、『草枕』と『趣味の遺伝』とをい、いづれも〈太平の逸民〉ともいふべき主人公の仮構の眼を借りつつ、文明のあやうさ、あるいは国家権力が国民にしている犠牲の深さが描き出される。

しかも後者(『趣味の遺伝』)について言えば、これが「帝国文学」に発表されたのは明治三十九年一月。書かれたのは前年末、十二月はじめのこと。この時日露戦争後の講和条約の不首尾をめぐって、これを政府の屈辱外交として国民が憤激し、講和反対の国民大会、日比谷の交番をはじめとしてあいつぐ焼打事件が起り、これを不穏な事態として三十八年九月、政府は東京府下に戒厳令を敷き、これが解かれたのは十一月三十日。『趣味の遺伝』

が書かれたのはこの直後である。ただここでも漱石の眼は単に国家権力に対する批判のみではなく、屈辱外交をみて憤激する国民の熱狂も、凱旋將兵を迎えて湧き立つ熱狂も、言わば盾の表裏であって、二なるものではないと見る。この国家意識、いや国民意識の何たるかをその作家としての冷徹な眼は見逃してはいない。

漱石はこれら初期の実験的作品にあって、言わばへ太平の逸民たちの諷語という形をとりつつ、作中しばしば激越な言葉を吐露する。彼ら主人公の妄語、妄想という体をかくれみとし、アリバイとしてと言ってもよい。『坊っちゃん』以後、「漱石は自分の中の詩を殺した」とは高橋氏の言う所だったが、実は『趣味の遺伝』も『草枕』も、これら一連の初期作品は言わば同様のものであり、これらはすべて漱石初期のへうた^たであったと言ってもよい。『御前が馬鹿なら、わたしも馬鹿だ。馬鹿と馬鹿なら喧嘩だよ』今朝かう云ふうた^たを作ったが、「先づ当分は此うた丈うたつてゐます」（明治41・8・11、高濱虚子宛書簡）とは、『草枕』を書き上げた（8・9）直後の言葉だが、すでにふれた『草枕』や『趣味の遺伝』にみる諷語の体は、ここにいう一連のへうた^たともみることが出来る。個人の革命は今既に日夜に起こりつつある」という、先の画工にみる激越な文明批判の言う所もまた、ある意味では後の啄木の一文の先取りとも言えなくはあるまい。「時代閉塞の現状」とはまさしく『草枕』の作者が逸民の口吻に託して言う所でもあった。

三

すでに啄木の一文に対する漱石の共感のありかは明らかである。しかしそれが『ころろ』作中においてKへの負い目へと転移しているとはまた、むやみに言い難い所であろう。他者への裏切り、またその故の負い目という。しかしそれが作中に最も深く、また微妙にひびく所があるとすれば、それがほかならぬ自分自身を、いまひとりの自分が裏切るという事態であろう。それは内部に深く沈潜して容易に消えることはない。恐らくこの問題に深く眼を向けたものとして、桶谷秀昭の『淋しい「明治の精神」——「ころろ」と題した一文がある。

「……私は未来の侮辱を受けないために、今の尊敬を^{しりぞ}斥けたと思ふのです。私は今より一層淋しい未来の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです。自由と独立と己れとに充ちた現代に生まれた我々は、其犠牲としてみんな此淋しみを味はなくてはならないでせう」（上 十四）。桶谷氏はこの一節を引いて次の如くいう。「これはよく引かれる有名な言葉だが、『自由と独立と己れに充ちた現代』が、先生が殉死したあの『明治の精神』の総体を意味するものではない。それは『明治の精神』の一面であり、他の一面は、『自由と独立と己れ』の、いわば『自己本位』の精神の犠牲となり、寂寞に襲われざるをえない淋しい『明治の精神』である」。先生は「この二つの矛盾する『明治の精

神』を抱いて淋しく生き、時代の終焉とともに死ぬ」。この「二つの『明治の精神』の演ずる劇」とは何かと問えば、「それは先生とKという親友の間におこった悲劇にはかならない。「おれは策略で勝つても人間としては負けたのだ」という。この「人間」とは「自由と独立と己れ」の「自己本位」ならぬ、「それを無にする伝統的な倫理観に支えられた人間」である。この「人間として負けた」という苦痛の感情は、近代がみずからの手で扼殺した過去の日本へのうしろめたい負目を象徴するものであり、こうして『こゝろ』のKの悲劇」とは「作者漱石に即せば、ロンドン留学以前と以後の二人の漱石の間の劇にほかならず」、「Kの死とともに先生はその前半生をみずからの手で埋葬したかにみえるが、しかし時とともにこの「前半生の記憶は、現在の先生の生に侵入し、不可思議な恐ろしい力でおびやかしつつける」となるという。見事な解釈というほかはあるまい。

余談を言えば、この評論の載った雑誌（『文芸』昭和45・10）

が届けられた時、一読してうなったものである。その半年前、桶谷氏の『道草』論（『自然と虚構』——「道草」昭和44・2・7「無名鬼」）にいくばくかの意見を呈したのだが、今度はいささかの想いのこもったものですという言葉を添えて送られたこの一文は、私の日頃のわだかまりを一拭するあざやかな一撃ともいえるべく、その読後の感銘は今も忘れがたいものがある。と同時に、桶谷氏のいうロンドン留学以前と以後という図式をいささか遡れば、

漱石探究 —— 『こゝろ』から何が見えて来るか

漱石少年時の二松学舎入学前後ということにもなる。漱石の年譜を辿れば、明治十四年一月、母千枝の死と共に彼は東京府立第一中学校を中退、漢学塾の二松学舎に入る。「元来僕は漢学が好で」「英語と来たら大嫌ひで手にとるのも厭」（『落第』）だったという彼は、母の死と共に開化の時流に乗る栄達の途を棄て、自己本来の世界へと傾斜せんとしたかにみえる。しかし二松学舎も翌十五年春または夏にはやめ、十六年九月には成立学舎に入り、英語の学習に専念、翌十七年九月、大学予備門に入学。この間の漢学と洋学の間を揺れ動く青春彷徨の時期はその生涯を決する一時期であり、あえて漢学を棄てたことはその生涯に深い傷痕を残し、その文明批判の文脈にも微妙な影を落とすこととなる。

このようにその時期を留学以前、以後とみるか、二松学舎入学前後とみるか、若干の差違はあるが、その自己本来の世界を切り捨てた、ひとつの裏切りというか、その傷痕の残る所は深い。ただここにも問題は残る。

このように整理してみれば、ことは明白に片付くかにも見えるが、なお問いは残る。Kという人物造型の多義性ともいえるべき問題である。先生はKを追いつめ、裏切ってしまう己れの卑劣さを言いつつ、また反面「其男が私の生活の行路を横切らなかつたならば」このような遺書を残す必要はなかったと言ひ、「私は手もなく、魔の通る前に立つて、其瞬間の影に一生を薄暗くされて気が付かずにあつた」のだという。また「世間は何うあらうとも此己は立派

な人間だといふ信念」も、「Kのために美事に破壊されて」しまつたと言ひ、さらにはKのお嬢さんへの恋情の告白とともに、「彼が解しがたい男」「一種の魔物のやうに思へました」ともいふ。

この矛盾はしばしば指摘される先生とKとの同性愛云々という解釈などとは明らかに対立するものである。むしろ作者はここで友情といいつつ、なおその奥にひそむ人間のエゴイズム、いや、エゴイズムなどと言つてもなお足りぬ〈魔の影〉ともいふべきもの。その人間存在の奥にひそむ捉えがたいまでの矛盾と深淵を問いつくそうとしているかにみえる。〈魔物〉とは他者ならぬ、自己自身の深淵にひそむ不可思議な影というほかはあるまい。かつて論者はこの〈私〉という若者の手記は、友人をKなどと頭文字で呼ぶような先生の非人間性を問ひ、これを差異化せんとするつよいモチーフにつらぬかれていと述べていたが、むしろこれはかつての論でも述べた所だが、差異化しているのはほかならぬ先生自身であり、「私は私自身さへ信用してゐない」「人も信用できない」「自分を呪ふより外に仕方のない」、疑り深くまた執念深い人間だといふ。Kのお嬢さんへの想いを諦めさせようとしては「狼が隙を見て羊の咽喉笛へ食ひ付くやうに」「残酷な答えを与えた」男だといふ。しかも「正直な路を歩く積で、つい足を滑らした馬鹿もの」「狡猾な男」だといふ。Kの死に動転しつつ、なお「私を忘れる事が出来」ず、Kの非難の言葉がないかと遺書に眼をさらす、それが自分だといふ。自己批判も、差異化も極まれば

というほかはあるまい。

しかも先生はこのように自身を問いつめつつ、「私はたゞ人間、の罪といふものを深く感じたのです」といふ。また妻の母の看病に際しては「力の及ぶかぎり懇切に看護」したのも、妻のためだけではなく「もつと大きい意味からいふと、ついに人間の為でした」といふ。また妻への愛情も「箇人を離れてもつと広い背景があつたやう」だといふ。このあたりについてはすでに玉井敬之のすぐれた指摘（『こゝろ』から「道草」「明暗」へ）があるが、それがついに「人間の罪」であり、「箇人を離れてもつと広い背景があつたやう」だといふ時、先生の筆が自身の一切を告白しつつ、さらに人間普遍の問題にまで深めんとする意図がみられよう。この告白の深さを論者のひとりにはカトリックにいう『告解』の論理」ではないかといふ（西成彦『鷗外と漱石——乃木希典の「殉死」をめぐる二つの文学——』）。

四

ここで思い出されるのは作家古井由吉の指摘である。「漱石という人がもしキリスト教圏で生まれていたら、存分に自分の思想をほじくられたんじゃないか。」「唯一の神が人間を罰しもし救いもするといふ、一神教という存在の中にあつたら、もつとあの資質は救われたんじゃないか。」「漱石という人の気韻、あるいは業の質みたいなのは、むしろキリスト教臭いものがあるという感じ」

(吉本隆明との対談『漱石的時間の生命力』)だと古井氏はいう。すぐれた指摘というべきだが、しかも告白すべき神なき風土にあって、なお真の〈告白〉とは何か。西氏はその故にこそこれが人生の何たるかを知らぬ未熟な一青年を対者としたことにおいて、〈告解〉のパロディだという。しかし、ここにひそむものはパロディの一語では片付かぬ、より真率なるモチーフの所在である。前年(大正二年)十二月十二日、母校第一高等学校の後輩たちに向けての『模倣と独立』と題した講演は、すでにそのモチーフの何たるかを語ってあまりあるものがある。

ここではすでに後の『こゝろ』の構想は熟しつつあるかにみえるが、その第一は「私は斯うやって人間全体の代表者として立つて居ると同時に自分自身」を、この「一個の夏目漱石と云ふものを代表して居る」のであり、つまりは普遍的人間と、一個固有の人間と、この両者を共に代表しているのがこの自分自身というものなのだという。先生が自己の内面を語りつつ、そこに「人間の罪と云ふものを深く感じたのです」という、その発想の根はすでにここにみることが出来る。またひとが罪を犯せば処刑され罰されるのは当然だが、「其罪を犯した人間が、自分の心の経路を有りの儘に現はすことが出来たならば、さうして其儘を人にインプレツスすることが出来たならば総ての罪悪と云ふものはないと思ふ。総て成立しないと思ふ。夫をしか思はせるに一番宜いものは、有りの儘を有りの儘に書いた小説、良く出来た小説」であり、この

ように有りの儘を隠さず漏らさず描きうれば、その人はその功德によって成仏出来、法律では罰されようとも、その罪は「十分に清められる」のだという。この真の告白によってその罪は消えるという言葉は再三繰返され、しかもそれがひとの心を搏つには「根柢」と「深い背景」が必要であると言う。ここで乃木殉死こそはその「根柢」と「深い背景」の故に、即ちその「インデペンデント」たる独自の行為の故に、その「行為の至誠である」ことの故に、「あなた方を感動せしめる」ものがあつたのだという。乃木殉死と言ひ、その「深い背景」への言及と言ひ、語る所はすでに『こゝろ』一篇にそのままつながるものがある。

すでに先生とKにふれ、「明治の精神」の何たるかにもふれた。あとは遺書の告白に向かつて追いつめられてゆく先生の必然こそが問われる所であろう。あえて言えば先生を死に追いつめたものはKへの裏切りでも、明治の終焉でもなく、〈私〉という青年自身であつたとは松本寛『漱石の実験』のいう所である。これは先の高橋源一郎も作中で深く推賞する所だが、たしかにきわめて説得性の高い論致である。叔父に裏切られた時も、自身Kを裏切つた時も、先生は自分に閉じ込めることで生きて来たが、いま〈私〉という青年が執拗に自分の世界に迫つて来た時、もはや拒むことは出来なくなった。〈私〉こそは「無意識のうちに『先生』の自殺を促した重要な作用者であつた」。言わば『こゝろ』は『先生』の前身である『私』という青年が、『先生』にめぐり合

うことよって人生のとは口までさしかかる物語と、『先生』という『私』の後身がそのとば口から破滅へと歩まなければならなかった物語とを重ねあわすところに成立していると言つてよいといふ。

いかにも明晰な分析だが、しかし先生が「明治の精神」への殉死を持ち出したのは「『私』の接近が『先生』の自殺の直接の契機となつてゐることを匿そうとした」ものであり、それはKがその遺書に「『先生』を責める言葉を一言も書き残さなかつたのと同じ」ではないかといふ時、「明治の精神」への殉死といふ、この作品の根幹をなすモチーフは明らかに疎外される。数年前『ころ』の研究史を辿つてみたことがあるが、同時代評を含め、大正から昭和へと、この時代の終焉の意義についてふれた論の殆どみられなかつたことは不思議であつた。いまその仔細にふれる余裕はないが、そのなかにあつて「明治天皇の精神とその生の出発を同じくするかれにとつて、統一的な明治の精神とその肉体とは、自己の人間の実体を形作つてきた、かけがいのない要因であつた」(『心』における自我の自覚と崩壊)といふ猪野謙二の指摘は銘記すべき所であらう。

また『ころ』における先生の「贖罪と殉死は全く性質を異にした」ものであり、この「関係のない行為を強いて関係づけたところ」に、『ころ』の分け難い部分、不透明な箇所(集英社『漱石文学全集』6解説)があるとは荒正人のいふ所だが、しか

しました「小説家の発想と技術といふことからいへば、『先生』の死を乃木大将の殉死とどう結びつけるかが、いふまでもなくこの小説の根幹である」とは大江健三郎(「記憶して下さい。私はこんな風にして生きて来たのです」)のいふ所である。たしかに大江氏のいうごとくあい反する両者をどう結びつけるかに、作者の苦心のすべてはあつたと言つてよい。この作品は「悲劇の道筋を通そうとすれば、隙間風が吹く」。しかもこの感動とは何か。ただひとつ「作品の声に聞くべきではないか」。これは「声によつて成り立つた、悲劇としての近代小説の、おそらく最後のひとつではないか」とは、同じく作家としての古井由吉(『漱石随想』)のいふ所である。

その聞くべき〈声〉とは何かと問へば、作品の、テキストの背後にこもる作家の肉声そのものといふほかはあるまい。「自由と独立と己れとに充ちた現代」とそこに生きる淋しさとは、ただに明治のひとつとしての先生の声のみではあるまい。むしろそこには大正という新たな時代にひとり生き残つた作者漱石自身の孤独な肉声がひびく。また明治の精神に殉死するとは「自身をかく在らしめた時代と刺し違へること」であり、「そうした自己否定によつてのみ、時代はその特殊性を捨てて、精神としての普遍性をもつて先生の前に現れてくるのではないか」(越智治雄「ころ」『漱石私論』)とは、またすぐれた評者のひとりといふ所である。恐らくこの〈普遍性〉とは、『ころ』といふ作品を、また「贖罪

と殉死」というあい反する局面をいかに統合するかという難題を解くひとつの鍵でもあろう。

すでにふれた通り、先生の遺書は己れの罪を語って「人間の罪」という普遍に迫る。同時に語り手の筆は明治という固有の時代のエトスをめぐって普遍の真実に迫ろうとする。先生、私、K、私の父というごとく、主要な人物の一切は固有名を消しとられ、語り手は明治という時代の内面を照射せんとする。「天子様もとう／＼御かくれになる。己おれも……」と言ひ、乃木殉死に際しては「乃木大将に濟まない。実に面目次第がない。いへ私もすぐ御後おあとから」という〈私〉の父の声は同時に庶民の声を語り、これもまたひとつの殉死であることを告げる。先生とKの葛藤が古き明治と新しき明治の相剋であることもすでにふれた。これが『模倣と独立』(大2・12・12)と『私の個人主義』(大3・11・25)という二つの若者へのメッセージとして語られた講演のはざまにあることもまた意味深い。遡れば熊本時代の『人生』に語る「思ひがけぬ心は心の底より出で来る。容赦なく且乱暴に出で来る」「剣呑なる哉」という作家以前の一文にこもる若者へのメッセージを具現化すれば、それが『こゝろ』一篇となる。〈私〉もまた新たな世代をあらわす普遍の象徴者として、先生の遺書の封印者となり、またその故に真の受諾者ともなる。

すでに見るごとく『こゝろ』が他者の不可解性を問い、人間の罪の深さを問い、さらには時代との訣別とは何かを問う、より演

漱石探究 —— 『こゝろ』から何が見えて来るか

繹的発想に立つとすれば、続く『道草』は反転して、より帰納的発想をとる。自伝性という必然もまたそこにある。また『こゝろ』において明治への訣別を語ることに於いて、作者ははじめて『明暗』という大正の時代を描きとろうとすることが出来た。この言葉の由来する〈明暗雙雙〉という古辞が人間内面の相対性をあらわすとすれば、それが同時に一切を相対化してやまぬ大正という新たな時代の価値観を示していることもまた意味深い所であろう。また「明治の精神」という時、それは〈乃木殉死〉と同時に、その対極ともいうべき〈大逆事件〉をも含む。天皇への殉死ならぬ「明治の精神」への殉死という時、漱石が何を語ろうとしたか、なお問いは残る。作品を読むことが同時に、作品に読まれることであるとすれば、我々はこの〈読むということの倫理〉の前に佇ちつくすほかはあるまい。漱石晩期の言葉を借りれば「こゝろ柿が甘い粉を吹き出す」まで、待ちつくすほかはあるまい。『こゝろ』一篇はなおその謎に値する一作品であったということが出来よう。